

[論文]

被災地での共創表現と共振の深化

— このフィールドは、何を語りかけているのか —

西洋子(東洋英和女学院大学 人間科学部教授)

三輪敬之(早稲田大学 理工学術院教授)

1. 研究の背景

1-1. 共創表現のフィールド

著者(西)は、創造的で即興的な身体表現による精神科入院病棟でのダンス療法(1995-2006)やコミュニティでのインクルーシブな身体表現活動(1998-現在)、国立民族学博物館における文化資源としての「もの」と、「こと」的世界を表現で繋ぐワークショップ(2008-2012)(図1)などを企画・運営し、現場ではファシリテータやセラピストとして活動者と共に身体で表現しながら、個々の表現創出を直接的に支援し、かつ表現を通じて活動者相互をつなぐ役割を担っている。



図1 国立民族学博物館での身体表現ワークショップ 「表現で出会う・表現でつながる」(2010、2011)

例えば、精神科入院病棟での身体表現活動においては、統合失調症等で他者への応答性が乏しく、時にまなざしさえ発現しない患者と身体によるやりとりを続けることで、極めてゆっくりと、あるいは突然に、動きやイメージが生成しはじめ、表現を創り合うに至る多くの貴重な実践経験を得ることができた[西 2012a]。また、コミュニティにおいて18年間継続しているインクルーシブな表現活動には、脳性麻痺や骨形成不全等の肢体不自由の障害のある子どもたちが多く参加しており、さまざまな人々が個々の特徴を活かし合うことで、年齢や性別はもとより、身体的差異や動きの制限を超えた共創表現が実現することや、インクルーシブなフィールドでこそ生まれる新しい表現があることを捉えることができた[西 2012b]。

その一方で、これら即興的な表現の過程においては、活動者相互が共創を希求しているにも関わらず、こうした思いとは別に、実際の身体的関係性においては、意識では回避できない多くのズレが生じ、不安や戸惑いの感情を抱え込んだまま表現が停滞することや、異なる他者と共に動いていても、自分の予測の範囲を超えた表現には至らず、そのうちに表現の場が萎んでしまうような感覚が生じることが多いことは言うまでもない。

そもそも「共創」とは、「背景の異なる人間が目標や夢を共有し、一緒になってそれらを実現していく創造的活動」であり、そこでは、「お互いの主体性や独自性を侵犯することなく、お互いどうしがコンテクストを共有しあうという、相矛盾した状態を自己のうちに整合することが必要」〔三輪 2000:283〕であるとされる。このことを踏まえると、「共創」においては、「私」から「私たち」という共存在の場(共存在感を伴った空間)が生まれることが必要になると考えられる。以下、本論文では、身体表現による共存在の場づくりを共創表現のフィールドとして提示し、そこでの表現を、共存在感の創出の有無によって、共同と共創とに分けて考察する。

上記のような共創表現のフィールドにおいて、西が実践の中核に据えているのは「身心の共振」¹⁾であり、それを体感する最もシンプルな手法として「てあわせ表現」を多く行っている〔西 2012a, 三輪 2012〕。いうまでもなく私たちの身体は、本来的に他者と出会い共鳴し合う存在であり、そのためにはたらきを有している〔市川 1997, 木村 2005, 中村 1993〕。身体での共創表現においては、さまざまな差異を超えて、このはたらきを相互に引き出し合うことができた時、自己と他者との境界は開かれ、相互主体的でありながら個を超えた一体感が自ずと醸成されていく〔野間 2012, 清水ほか 2000〕。「包まれつつ・包み、包みつつ・包まれる」といった比喻で語り得る「身心の共振」が、連続する表現の中で生成することは、原初的体験としての舞踊やスポーツ、音楽の合奏場面等での経験を通して、多くの人々が了解する事実である〔木村 2005, 清水 2007〕。

著者らが行っている「てあわせ表現」とは、活動者相互が手を合わせ、身体の能動と受動を同時的にやり取りしながら、各々が主体的に、かつ一緒に表現を創り合う活動である。私たちの手は、触れることで相手のあたたかさや接している面の質感を瞬時に感じ取る繊細な部位である。さらに、表現の経験が少ない者や動きの発達の未成熟な幼児であっても、いくつもの小さな関節を駆使して手全体の形状を変化させることは容易であり、そこから全身へとつながる実に多彩な表現を生み出すことができる。西のこれまでの実践経験では、手とそれを介した全身による複雑で微妙なやりとりは、他者との出会いやつながりに向かう非言語的で前意識的な領域を表出させる可能性を含むことは明らかであり、したがって「てあわせ表現」によって、「あなた」や「私」という個の枠を超え、共存在感のある「私たち」が表現として生成する可能性は極めて高いと考えている。

以上の点より、本研究では、「共創表現と共振の深化」の検討に際して、「てあわせ表現」を具体的な材料とする。

1-2. 共振の深化過程の5つのモード

著者らは、共創的な身体表現に生成する「身心の共振」に着目して、「てあわせ表現」を対象とする共同研究を継続している。例えば、250名の活動者を対象にしたアンケート調査とその結果の統計的手法を用いた検討によって、共振の発現過程のモデル化を試みる研究〔西 2003, 西ほか 2005〕や、一軸の装置開発による「てあわせ表現」のダイナミクスの計測手法に関する

研究[三輪 2012,Watanabe et al. 2012]、エピソード記述による共振の生成過程に関する質的研究等である[西 2012a,Miwa et al. 2013]。特に「てあわせ表現」における共振の深化の過程については、これを、共存在感の場の創出とかかわる質的指標と位置づけ、西自身のフィールドでの実践感覚や集積したエピソード記述に基づいて、連続する5つのモードを指針として推定し、モーションキャプチャーを用いた実験的試行における身体部位の位置計測により、各モードの特性を現象的に明らかにした。あわせて、それぞれの身心の状態を象徴する言語的表現を検討した(図2)。

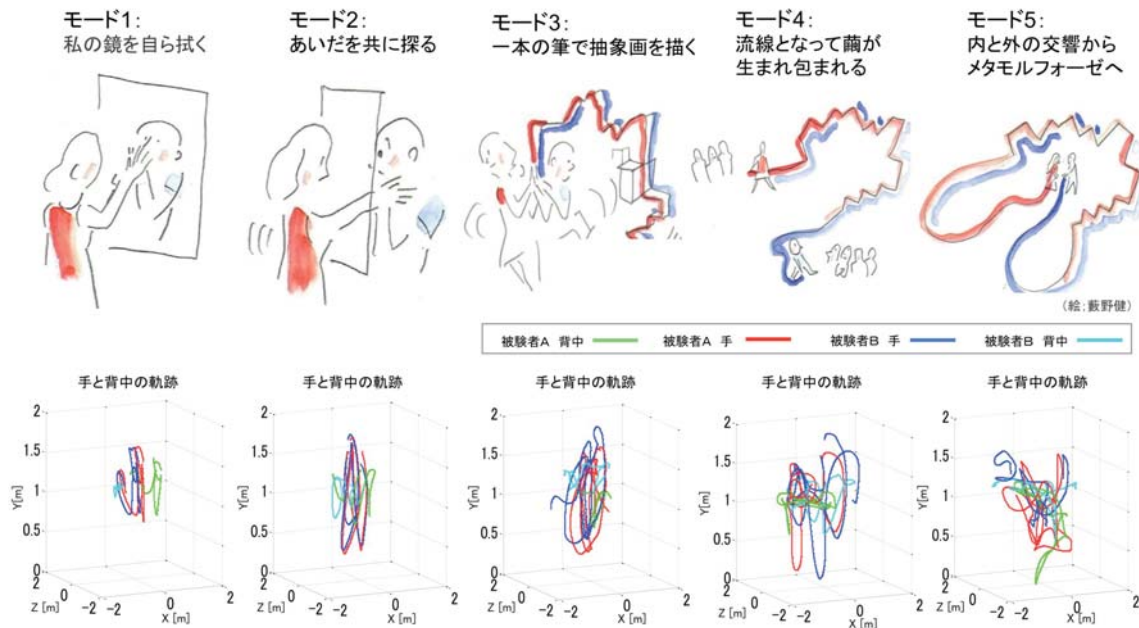


図2 てあわせ表現での共振の深化

図2に示すように、自己と他者が身体を介して出会い、同時に動きを交流させる「てあわせ表現」では、最初の段階として、合わせた手で創られる界面が崩れることなく、身体的位置関係が不変で相互に均一であるモード1が推定される。「私の鏡を自ら拭く」としたこの段階では、合わせた手自体は空間内を自由に動いていても、両者のあいだにはそれぞれの自己のみを映し出す鏡が存在するかのようであり、双方が自己の鏡を拭くように振る舞うことで表現が進行する。その後、この界面は少しずつ緩みはじめ、これまでは踏み入ることがなかった他者の側の空間を探索したり、逆に自己の領域に他者を招き入れたりするようなモード2「あいだを共に探る」の段階が現れる。さらにモード3になると、これまで堅持し強く意識化されていた界面は殆ど意識にのぼらなくなり、合わせた手を一本の絵筆のように使って、自他の領域をも含むより広い空間内を自在に動きながら、共同作業的に抽象的な自由画を描くようなモード3「一本の筆で抽象画を描く」の段階が現れる。このモード3においては、両者の意識は合わせた手とその周辺に集中しており、自己以外には、向き合う相手とその時々動きが強く感受される。しかしながら、モード4「流線となって繭が生まれ包まれる」段階に入ると、今度は両者が描いた抽象画の表現世界に自身が自然に入り込むような感覚が生じてくる。私たちの表現それ自体に包まれるようなこの段階では、たとえ両者の手の非接触時間が長くなっても、表現により創出した世界の内側とその淵を感じている限りは、相手との確かなつながり感が保たれるのである。このモード4においては、表現は安定する一方で、時間の経過に伴い新たな表現が創出する感覚は徐々に薄ら

いでいく。その後のモード5では、相互に創り合う安定した表現世界を基盤に、より広い外の世界との交流を求めて、表現それ自体を自ら開くことで、「私たち」と外側世界との交流がはじまる。このモード5「内と外との交響からメタモルフォーゼへ」の段階では、「私たち」はあたかもひとつの生命のようであり、これまで自己と他者として為してきた来歴は、さらに大きな外側の世界との響き合いの中へと昇華されていく。こうして、つながり感を保ちつつ限定されない外部世界との新たな関係性を築きはじめることで、表現世界は刻々と更新され持続するのである。

2. 東日本大震災の被災地をフィールドとする意味と研究の目的

本研究のフィールドは、東日本大震災の被災地である宮城県石巻市および東松島市での身体表現ワークショップである。著者らは、2011年の9月から月に1回程度の割合で東日本大震災の被災地域である宮城県内を廻り、津波で大きな被害のあった現場を訪れたり、仮設住宅を訪問して被災された方々のお話を伺ったりしながら、表現ワークショップを構想する準備を進めた。加えて、その時々に出会いを得た人々を対象に、パイロットスタディとしての小さな身体表現ワークショップを実施した。約1年間の被災地訪問と小規模ワークショップで得た現地の方々との直接的なかかわりを通じて、特に言語の未成熟な幼児や自閉症等の発達障害の子どもたちは、被災経験やその後の生活環境の大きな変化に適応できずに困惑した状態が続いており、状況を理解することや自らの心情を言葉で整理・表出することが困難なことから、身体を介した非言語的なコミュニケーションと共創的な表現活動の必要性を強く感じた。また、こうした子どもの家族や子どもたちと日常的に関わる教育・福祉関係者は、自身が被災しているながら援助者であり続ける状況が長期間続く中、自分自身の感情に素直に向き合い、それを自然に表現することを抑制する傾向が顕著であると感じられた。震災によって失われた「もの」の現実的な復興は、ゆるやかなスピードではあるが目に見える形を伴って進行していく。その一方で現地では、目に見えない多くの「こと」的世界もまた深く傷ついており、著者らは、その回復や新たな構築を目指して、居場所感覚の創出につながるような共創表現のフィールドの立ち上げとそこでの実践研究が極めて重要であると考えた。そこで著者らは、2012年の12月から月に1回程度(年間10回)の割合で、東松島市の赤井市民センターを会場に、石巻支援学校の児童・生徒とその家族および一般市民等が参加する「てあわせ表現」を主活動とする身体表現ワークショップを企画し、このフィールドでの研究に着手した。

ワークショップの開始当初の参加者は、これまでの約1年間のパイロットスタディを通じて、現地で知り合った方々とその関係者であった。当時は、「みんなで一緒にからだを動かして表現しましょう」という大まかな活動内容が、人づてに伝えられたのみで、特段の社会的位置づけや明確な広報活動には至っていなかった。震災から1年9月が経過していたが、石巻市や東松島市では、震災と津波の影響が生活全般にわたって続いており、現実的な復興とは質の異なる試みが、現地の人々に受け入れられるかどうかの予測もつかないまま、わずかなつながりを頼りに、ワークショップの定例化を試みる運びとなったというのが現実である。そのため、初回時には、知人に誘われて、どんなことをやるのかよくわからないまま参加したという方や、子どものあそびの活動だと思って付き添いのつもりで参加したという保護者が殆どを占めていた。

現在(2015年8月)で27回目を終えた本ワークショップは、開始当初より3年(30回)をひとつの区切りと考え、現地の参加者との協働を得て実施している。現在では、毎回40~50名ほどの多様な人々が参加するインクルーシブな共創表現の場となっている(図3)。



図3 フィールドでのあわせ表現ワークショップ(石巻市・東松島市)

この間、本ワークショップは、教育や療育、療法やコミュニティづくり等に何らかのかたちで寄与しているとは考えられるが、そのどれをも直接的な目的として掲げることなく、「身体での共創表現」のみを参加者相互で共有、確認しながら進んでいる。

本研究では、図2に示した「共振の深化」を指針として、本ワークショップの前半期(2012年12月～2014年6月:計15回)のワークショップ参加者の表現の変容を、エピソード記述を中心に事例的に捉え、「このフィールドは、何を語りかけているのか」という問題意識に基づき、被災地での身体での共創表現を通じた実践の意味を検討することを目的とする。

3. 研究方法

3-1. 本フィールドの記録方法と倫理的対応

本研究が収集・記録するデータは、音声・画像(動画・静止画を含む)、及び、アンケート調査・半構造化面接による個別情報等多岐にわたる。したがって、本研究の実施に当たっては、対象者の人権及び尊厳を重視し、個人情報の保護に留意するため、収集される全ての情報に対して、早稲田大学倫理審査委員会による以下の審査・承認を得ている。

- ・アンケート調査・半構造化面接による個別情報(研マネ第107号:申請番号2014-025)、
- ・音声・画像情報(研マネ第188号:申請番号2014-068)

3-1-1. 活動の記録とエピソード記述

毎回のワークショップの活動内容を時間軸に沿って記述・整理した。また、ワークショップの場でのファシリテータの気づきをエピソード記述としてまとめ、個人や集団の表現の変容を検討する際の資料とした。

本研究では、行動中心主義や客観科学の枠組みとは別に、人と人々が共に生きることの意味を考え、実践や研究に新しいパースペクティブを切り開くための質的研究を目指す「関与観察とエピソード記述」[鯨岡2005,2012,2013]に依拠した検討を進める。鯨岡が提示するこうした手法は、

「人と人の接面で生じていることをその一方の当事者の立場から描き出して、自分の実践や関与のありようを吟味していく」[鯨岡 2013]ための手続きであり、特にエピソード記述は、事実や出来事の客観的記録ではなく、「出来事の流れを示しながら、そこでの自分の心がこのように揺さぶられた、相手の心がこのように動いたのが分かったというような、接面における自分や相手の心の動き」[鯨岡 2013]を核心部分とする記述であるとされる。

本研究における著者(西)は、研究対象である共創表現活動のファシリテータとして、ワークショップ全般に関与する実践者である。以下では、ワークショップ参加者とファシリテータである著者(西)とが、身体を介して直接的に表現を創り合った事例を、一方の当事者の立場から描き出すことを試みる。これは、鯨岡の示すエピソード記述に概ね該当するが、共に表現を創り合うという視点からは、創出された表現そのものへの気づきや、表現を介した気づきをも含むこととなる。身体での共創表現の現場をどのような手続きのもとに研究するかについては、著者らが継続して抱えている未解決の研究課題である。本研究では、こうした問題を孕みながら、まずは、鯨岡に依拠したエピソード記述を中心に、それに加えて、身体表現の記録として独自性の高い映像記録(3-1-2)と被災地での共創表現ワークショップを現地の参加者の語りを通して探ることを目的とするインタビュー記録(3-1-3)の検討結果を参照しながら、実践の意味を掘り下げることにする。

3-1-2. 映像記録とその検討

各回約3時間のワークショップの様子は、以下に示す2つの視点から、1～3台のビデオカメラおよび1組のハイビジョンステレオカメラを用いて動画像として撮影を行い検討した(図4)。

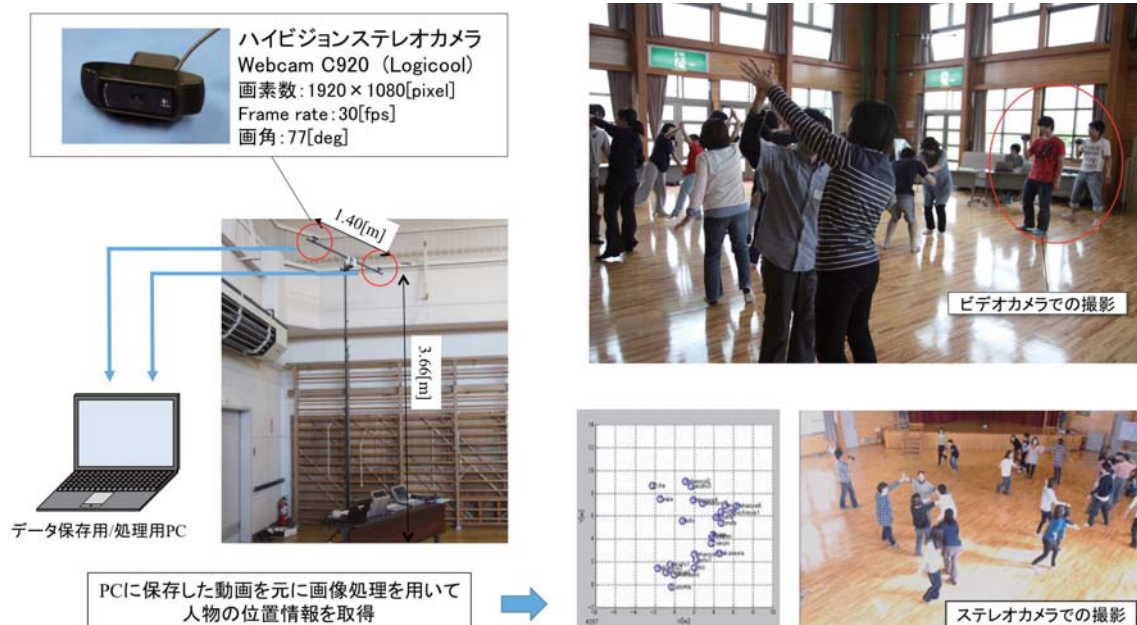


図4 ワークショップでの映像の記録

①ワークショップでの各参加者とファシリテータとの「てあわせ表現」場面や、グループでの作品創作・発表場面、最後の感想を述べる場面等を中心に、撮影者が1～3台のビデオカメラでの撮影を行い、個々人の表現の変化や個人と集団との関係性を事例的に検討した。

②ワークショップ会場(15[m] × 15[m])全体の動画像をハイビジョンステレオカメラによって撮影し、集団における個々人の位置や参加者相互の位置関係を検討した[三輪ほか 2014]。

具体的には、収集した映像の動画内の各人の頭部を色や形状の特徴から抽出するとともに、ステレオ法により3次元トラッキングして、個々人の頭部位置を連続的に記録した。次に、身体頭部の位置を各人の存在位置とみなし、参加者全員の活動中における移動方向や移動軌跡などを求め、2次元マップ上にアニメーション表示した。

3-1-3. インタビュー記録とその検討

ワークショップに継続的に参加している参加者(障害のある子どもの保護者等)6名に対して、2014年3月～6月の期間に、一人につき約1時間の半構造化インタビューを実施した。インタビューは、「初めて、てあわせ表現を行ったときどんな感じがしたか」「てあわせ表現を続けてきて、どんな変化を感じるか」等のワークショップでの「てあわせ表現」に関する質問を中心に、対象者が自由に語る会話の流れを尊重しながら研究協力者である臨床心理士の有資格者が行った。インタビューは動画で撮影し、それをもとに作成した逐語録から、参加者の主観を通してのワークショップでの表現の変容の過程を探ることを試みた。

3-2. 検討事例の抽出

第1回(2012.12.09)から第8回(2013.10.13)の8回分のワークショップを対象に、上記3-1-1～3-1-3で示したエピソード記述および映像記録やインタビュー記録等を個人や場面ごとに分類・整理して、参加者の表現の変容に関する検討を行った。その際、「共振の深化」の過程を示す5つのモードを参照して、モード間の移行が特徴的であった以下の2つの事例を抽出した。

①事例1:モード1～2への移行が認められた事例

自閉症のT男とファシリテータN(著者(西))のてあわせ表現

②事例2:モード3～4への移行が認められた事例

ファシリテータN(著者(西))を含む複数の成人男女(障害のある子どもの保護者等)による即興表現作品「花は咲く」

4. 結果および考察

4-1. 事例1:モード1～2への移行が認められた事例:自閉症T男とファシリテータN(著者(西))のてあわせ表現

4-1-1. 被災時のT男について

T男(16歳)は、自閉症の中核症状とされる行動特徴(小林ほか 2005;村上 2008)を有する。有意語は殆んどなく、言語でのコミュニケーションは困難である。感覚過敏であり、他者との身体的な接触を極端に嫌い対人回避傾向が強い。また、「口に咥えたストローを吹く」等の常同反復行動が多くみられる。

震災直後の石巻市とその周辺の障害のある子どもたちや家族の様子は、2012年2月に宮城県立石巻支援学校から刊行された『東日本大震災から学んだこと 石巻支援学校からのメッセージ』に多く記されている。ここに収められているさまざまな記録の中で、震災当時の中学部主事の先生が「石巻支援学校 避難所運営(3/11～5/8)の記録」として綴った文章の中に、避難所となった支援学校のプレイルームでのT男の様子が記されている。以下、該当部分を抜粋する。「多くの方々の協力と頑張りに支えられた六日目の夜(3/16)のことです。消灯時間が過ぎた21時半、

突然「ぎゃーっ」と火のついたような叫び声が響き渡りました。自閉症のある男の子の声でした。その子の懸命で必死な表情には(誰か助けて!!)という心の声が、痛いほど表れていました。手回し懐中電灯を持った父親が男の子に寄り添い、三人で真っ暗な校舎内をしばらく歩くことにしました。それでも、一向に男の子の声と険しい表情は穏やかになりませんでした。・・・暗闇の中、トランポリンを一時間近く跳んでいたでしょうか、憔悴したように側に寄り添うお父さんの姿と必死な表情でトランポリンを跳び続ける男の子の姿に、心が痛みました。この夜、この男の子とお母さんには集団から離れた小学部棟の教室で休んでもらうことにしました・・・」。

また、T男の母親は、著者らに対して、震災直後にはT男が食べることでできる物を求めてスーパーの長蛇の列に並ぶものの、パニックを起こす状況を繰り返し、それでも必死に我慢させて何とか食べ物を得たことや、自宅の1階部分が浸水したため、母親の実家に1か月預けられたT男が石巻に戻る際に、被災した陸前高田の様子を目にして号泣したことなどを語った。

4-1-2. T男とファシリテータNとの手合わせ表現の変容

第1回(2012.12.09)から第8回(2013.10.13)までの計8回のワークショップ時に収録した全ての映像記録の中から、T男とファシリテータNの2名が、ワークショップの参加者全員の前で「てあわせ表現」を行う場面を抽出した。その結果、第1回、2回、3回、5回、6回、8回の計6回にその場面が確認された。2名での「てあわせ表現」場面が抽出されなかった回のうち、第4回のワークショップにおいては、進行の都合で他の成人男性を含む3名での「てあわせ表現」を行っており、また第7回ワークショップは、実施日が2013年8月22日という夏休み期間であったために参加者が大変多く、加えてワークショップの会場が新しい場所であったことから、T男はワークショップ自体には参加したものの、新規の要素に困惑した様子で活動そのものに入ることは少なく、NはT男との表現を試みたが上記条件での「てあわせ表現」を行うことはできなかった。

まず、第1回のワークショップにおいてNは、3時間の活動時間内に何度かT男と手を合わせることや手を繋ぐことを試みたが、身体的な接触はもとより目を合わすことも容易に叶わず、NがT男の方に近づこうとすると回避されるような状況が繰り返された。本研究では、両者のこのような関係性をモード1以前の「かかわりが持てない状況」とする。結局この回は、ワークショップ終盤のグループでの即興表現の発表場面で、T男がスキップをしながら、会場の中央を横切るように表現空間に参入したことをきっかけに、Nは即座に反対方向からスキップを行い、すれ違いざまにハイタッチのような形で手をあわせることを連続して2回できたのみであった。初めて参加したワークショップで集団に馴染めず、殆どの時間を会場の隅で座って過ごしたり他の参加者らが表現を行っている活動の場の周囲をぐるぐると回ったりする様子を見せていたT男は、ファシリテータであるNにとっては、大変気がかりな参加者であった。最後に2回のハイタッチを行うことで、わずかではあるが何とかT男とのかかわりをつくることができ、N自身は大変嬉しく安堵したことを記憶している。

ほぼ2カ月後の第2回ワークショップ(2013.02.11)では、Nは参加者の一人ひとりと「てあわせ表現」を行い、T男の順番となった(図5)。



図5 T男とNとのモード1での「てあわせ表現」(第2回ワークショップ)

母親の隣に座っていたT男は、Nが歩み寄っても下を向いたままであったが、Nは右手でT男の右手をとって見た。T男が顔を上げる様子や特に反応する様子をみせなかったため、Nは「このまま手を離されてしまうのではないかと感じたが、T男の身体からは拒絶するような感じも受け取られなかった。映像からは、その後Nが下を向いたままのT男の右手に語りかけるような表現を全身で試みている様子が観察される。その右手を一度離し、今度は同じ位置にあらためて左手を出すと、T男は相変わらず下を向いたままではあるが、その左手に自身の右手を合わせてきた。すかさずNが今度は右手を出すと、T男が左手を合わせてきたので、下を向き座ったままのT男と中腰となっているNとが向き合って両手を合わせる形となった。そこでNは自身の手が下になるよう手をつなぎ直してT男の手を持ち上げるように力を加えてみると、T男は少し驚いたような表情で顔をあげ、Nに促されるようにしてすっと立ち上がった。そのままNが後ろ向きに歩き、T男をリードするような形で参加者がつくる輪の中央に二人で移動しながら、ゆっくりとした「てあわせ表現」を行っている様子が観察される。その間Nは、「すぐに壊れそうなガラスの箱を持ち上げて、ゆっくりと動かしている感じ」がして、身心ともに緊張したこの時間がとても長く感じられた。この時の状況は、モード1「自らの鏡を拭く」をより鋭敏に示していると考察される。次いで、表現の過程で一度離れた両手を再度合わせることはできているが、「これ以上は持続できない」と感じた時点がT男とNとで一致したような瞬間が訪れ、そこで一端離れて、再度「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えるように両手を合わせることでこの回は終了となっている。第1回の「かかわりが持てない状況」やハイタッチによって瞬間的な接点のみがつけられた表現からは想像もできなかった、T男とNとのモード1での「てあわせ表現」の実現であった。事実T男の母親は、初めて連れてきたときは、「会場の中にいられるとよい」とだけ思い、その他には「何も期待していなかった」けれど、この回には「全く予想もしなかったことが起きた」と驚きを語っている。

第3回(2013.03.20)は、3分37秒という長い表現時間となっている。この回に特徴的に観察されることは、向かい合って手を合わせる際に、前回は身体が一定の距離を保ったままの表現が殆どであったものが、両手を合わせたままお互いに近づいたり離れたりと、さまざまな距離

でのかかわりを自然につくりだしている点である。また、第2回と比較して、表現空間は広く、手を合わせたり繋いだりの状態でゆっくりと歩くことや小走りに移動することなど、多様な速度での移動を行っている様子が認められる。その際、手を繋いだ状態でT男がNに方向を示すように先行して移動する場面があり、その時Nは「T男が私を連れていってくれる」と感じ、身体を介してT男の存在がより生き生きと感受できたことが印象に残っている。さらに、前回までのT男とNとの身体の位置関係は、向き合っているか横並びであったものが、この回は片手を繋いだ状態で、T男がNの背面に回り込んだり、その逆にNがT男の背面に回り込んだりしている場面が観察された。その際、これまでは身体に触れられることを極度に嫌っていたT男の背中にNが表現の自然な流れでタッチしても回避することはなく、そのまま受け入れて表現が持続する場面が何度か登場している。また合わせた手や指での力のやりとりが生まれ、Nは動きの多様化とは別に「二人の身体での会話が少しずつ豊かになっていく」と感じることができた。

第5回(2013.06.09)は、Nがワークショップの参加者全体に対して「てあわせ表現」を説明するデモンストレーションの場面でT男との表現を行った回である。映像では、二人が「てあわせ表現」をしながら、Nが大きな声で説明をする様子も多く確認された。その際、突然の大きな声にT男は耳をふさぎ驚いた表情を見せたりはしているが、その場を離れることはなかった。また、動きながら説明を行っているため、表現自体の流れとは無関係に動きのスピードが緩んだり動き自体がとまったりという状況も何度か生じているが、T男はこうした場面でも上手く適応しながらNと共に表現を行っていることが観察された。42秒の表現時間内で参加者への簡単な説明も行っているため、実際の表現自体は短いものであったが、前回に出現した力のやりとりが手や指だけでなく合わせた手を介して身体全体に広がり、それによって自他の境界が緩むような瞬間があることが映像から感じられる。また、これまでは二人の表現が終わると、T男のみが会場の隅の定位置に移動するか、あるいは、T男がふいに表現の場を離れることで二人の表現が終わることが殆どであったが、この回は、表現が終わっても、T男は参加者全体に対して説明を続けるNの横にそのまま居続け、ファシリテータとしてのNの役割を一緒に担っているかのような様子が観察された。

第6回(2013.07.14)の大きな変化は、NがT男を「待つ」時間の生成とT男がそれに応えるという表現が実現していることである。「てあわせ表現」において、両者が非接触的な表現を試みる初期の段階としては、合わせている両手を一旦離して、直後に同時に同じ位置を目指して接点をつくりなおす表現が一般的に多く行われる。この回には、このような表現以外に、片手は繋いだままで、もう一方の手を離して別の位置で待つという表現や、繋いでいる側の手も瞬間的に離し、身体全体が非接触となる時間をつくる様子が何度か確認された。さらに、相互に両手を離し、これまでの表現の流れを新たにするかのように別の位置に置かれたNの非対称的な両手に向かって、T男がゆっくりと歩み寄り手を合わせるといふ、これまでにはない全く新しい場面が観察された。上記のような完全な「待つ」時間の生成は、この回の表現中1回の出現ではあるものの、Nが信頼をもってT男を「待つ」とT男がしっかりとそれに応答するという、より深い身心の交流が実現していると考察される。即興的な共創表現でのこうした変容は、意図的につくりだすことができるものではなく、その時々両者の身心の関係性が、表現を介して自ずと身体に現れていると推察される。

第8回(2013.10.13)は、T男とNとの「てあわせ表現」に、モード2「あいだを共に探る」が現れた回である。この回の「てあわせ表現」は、これまでと同様のゆったりとした動きからはじまり、

中盤から指を介した強い力のやりとりが行われている。やがてそれが相互の全身に拡大し、向き合って両手をつないだまま架空の一本の直線上を前後に大きく移動して押したり引いたり表現へと発展している。その際、両者ともにこれまでは踏み込むことのなかった他者の身体の領域にダイナミックに入っていくことや、逆にこちら側に引き込むような表現を行っていることが観察される。Nにとっては「T男と思い切り動いている中で、一体感のある表現を行っている」印象を強く持った回であった。

以上、ワークショップの現場で集録した映像記録から、第1回、2回、3回、5回、6回、8回におけるT男とNとの「てあわせ表現」の質的検討を行った。表1は、上記で検討した「てあわせ表現」時の両者の身体的な関係のあり方を、①〈接点や界面の生成と関係〉、②〈接点や界面での時空的関係〉、③〈身体の相対的な位置関係〉の3つに分類し、それぞれに関連する要素を抽出してワークショップの時間的経過にそって並べたものである。あわせて、出現の形態については、①〈出現：○〉、②〈不完全な出現：△〉、③〈出現せず：×〉の3つに分類し、初めての出現については、〈出現：●〉、〈不完全な出現：▲〉として2回目以降と区別した。

表1 T男とNとのてあわせ表現における身体的な関係性

ワークショップNo	1	2	3	5	6	8
ワークショップ実施期日	2012.12.09	2013.02.11	2013.03.20	2013.06.09	2013.07.14	2013.10.13
T男とファシリテーターとの手合わせ表現時間	—	0:50	3:37	0:42	0:40	1:02
①接点や界面の生成と関係						
手を合わせる1. 接点をつくる	●	○	○	○	○	○
手を合わせる2. 界面をつくる		●	○	○	○	○
手をつなぐ(手をつかむ)		●	○	×	×	○
指を合わせる		▲	○	○	○	○
手で力のやりとりをする			●	○	×	○
指で力のやりとりをする			▲	●	△	○
②接点や界面での時空的関係						
同時に接点をつくる	●	○	○	○	○	○
同時に界面をつくる		●	○	○	○	○
同時に接点をつくりなおす		●	○	○	○	○
界面で待つ1. 片手をつないだまま			●	×	○	○
界面で待つ2. 片手を瞬間的に離して				×	●	×
界面で待つ3. 両手を離して				×	●	○
③身体の相対的な位置関係						
身体が向き合う	●	○	○	○	○	○
身体の距離が相互均一に変化する			●	○	○	○
身体の後ろに廻りこむ			●	×	○	×
身体の距離が不均一に変化する						●

●初めての出現 ○出現 ▲初めての不完全な出現 △不完全な出現 ×出現せず

本フィールドでの実践研究を通して、身体的な共創表現での「身心の共振」の変容過程に関しては、著者らが指針として推定した5つのモード以前に「かわりが持てない状況」があることが確認された。また、モード1からモード2への移行というマクロ的な変化に至るには、表1に示すような両者の身体での関係性のミクロ的要素の変化が連続的かつ重層的に起きていることが明らかとなった。

「てあわせ表現」での「身心の共振」の深化過程として推定した初期段階であるモード1からモード2への移行では、〈接点や界面の生成と関係〉において、まずは自己と他者とが合わせた手によって接点や界面を生成させて自他の境界を確認し合い、次第に手や指で力のやりとりを行うようになることが観察された。また、〈接点や界面での時空的関係〉は、手を合わせたたりつないだりする接触的な局面が同時的につくられる段階から、両手から片手へ、その片手を瞬間的に離してといったように非接触的な局面が徐々に拡大し、やがては一方が新たな界面を設定しそこで相手を待つことと、他方が待つ側の界面へ手を合わせに行くという、信頼感を基盤とする

より深化した関係性によって、表現が自ずと変化する様子が見られた。さらに、〈身体での相対的な位置関係〉については、それぞれの身体はさまざまな動きを行いながらも、両者の身体と界面との距離は常に一定である段階から、その距離が相互均一の状態のまま両者の身体が近づいたり遠のいたり動的に変化する段階へと移行することが観察された。やがて、この身体の距離は相互不均一となり、モード2の「あいだを共に探る」が生成する前段階には、手をつないだまま相手の後方に回り込んだり背中に接触したりという、背面への積極的な探索が起きていることが観察された。

4-2. 事例2: モード3~4への移行が認められた事例: ファシリテータN(著者(西))を含む複数の成人男女(障害のある子どもの保護者等)による即興表現作品「花は咲く」

抽出した事例は、ワークショップに継続的に参加している成人男女(障害のある子どもの保護者等)が第7回ワークショップ(2013.08.22)で行った「てあわせ表現」による即興作品「花は咲く」である。以下ではこの事例について、3-1-1~3-1-3で示した映像記録やインタビュー記録等による検討を行う。特に3-1-3のインタビュー記録については、インタビューを実施した6名のうち、即興作品「花は咲く」に演者として参加した4名分の逐語録を検討の対象とし、語られた言葉そのままを「 」として引用する。なお、「 」内の[]はインタビュー実施者の発語を示す。対象者4名はSub.1~Sub.4と表記し、発言の最後の()内に〈発言番号/全発言数〉を示した。

第1回ワークショップ時の保護者らの様子を映像から観察すると、子どもの付き添いのような雰囲気の中で表現の場の周囲に座って活動を眺めているか、保護者同士で別の話をしている時間帯が殆どであり、ファシリテータに促されて表現に参加する場面でも、遠巻きに子どもを見守るような様子で、主体的に表現する姿は殆ど認められなかった。保護者らへのインタビューの中で、初めて参加した時の自身の様子については、「印象的な。はあ、あれは、私、最初のほうはあんまり参加してなかったんですけど」(Sub.1:131/240)「しばらく、こう[はい]、見てたんですけどね」(Sub.2:76/282)「私には、はい、あの、さ……、でも、自分も参加するものなんだっていうところを知り」(Sub.3:36/434)と語り、初回には、保護者自身がワークショップに参加する意志がほとんどなかったことが明らかである。また、1~3回目までのワークショップの初期段階では、活動には徐々に参加するようになっても、「てあわせ表現」において他者とのつながりを積極的に創りだすことは難しい様子が確認された。しかしながら、ワークショップへの参加を重ねるうちに、子どもたちの表現とその変容に触発され誘引されるかのように、保護者らの「てあわせ表現」への参入はより主体的・積極的となっていった。保護者らが子どもたちの表現とその変容をどのように捉えているのかをインタビューから抽出すると、例えば、発達障害のあるH子の母親は、「それで、あと、もう気持ち良く、こう、自由に動けるといっつか、自分の、感、感性のままといっつか、感じ、動くままに、感情のままに(Sub.3:15/434)で」「H子は、まさにそれなので、あ、はい、やらせてみて、すごく楽しかったですね。はい」(Sub.2:16/434)と語っている。また、初対面の人や集団への回避傾向が強い自閉症のM男の支援者として参加しているSub.2は、M男が数回のワークショップを経てフロアの中央で「てあわせ表現」を行うことができた時の様子について「(N先生が)M君にね、こう、こうしたのを[そうですよね]、M君の、こう、フロアの中央に、こう、みんなびっくりしました」(Sub.2:60/282)「それが、今や[はい]、あの一、いつもそう、そのようにされて[あー]、そして、この前の、今までにない笑顔を見せて、見せたときには[はい]、ええ、ここまで[あ]変わるもんかと思って、驚きましたです」(Sub.2:61/282)と述べている。さらに、子どもたちのワークショップに対する家庭での様子について、自閉症の

T男の母親は、「いかなきゃないと思うと[そうですね]、何か、こう、この何ていうの、ワークショップは、すごく、ああ、明日だな、明後日だなどかって思って、すごく楽しみで来れるので。そういう経験って、そんなに滅多にないですね」(Sub.4:36/161)と語っている。

こうした子どもたちの変化を受け、抽出した第7回のワークショップの頃には、保護者自身が子どもから離れ、一参加者としてそれぞれが表現を楽しみ、さまざまな他者とかかわる様子が多く観察されるようになっていく。その経時的変化を保護者自身がどのように捉えているのかをインタビューから抽出すると、「それが、今や、何か、M君の支援サポートという意識はなくなってしまいましたね」(Sub.2:70/282)と家族や知人のために参加しているという意識が薄れ、「でも、だんだん何か回を重ねるごとに、こう、心地いいというか、気持ちいいというか、楽しいというか、何かそういう気持ちになりますね」(Sub.3:39/434)、「何か、ほんとに、何か言葉でないもので繋がるっていうかね。うん、一瞬こう、何ていうんですかねえ。気持ち良くなるんですよ、やっぱりね、何か。ただ、こう運動するのと違うような感じの気持ち良さはあるかもしれないですね」(Sub.4:34/161)と、自身が表現することの開放的な心地よさや、「てあわせ表現」を通じて他者とつながり合うことの気持ちよさを語っている。一方で、保護者らが主体的に「てあわせ表現」を行う経験が深まることで、「てあわせ表現」時の自己と他者との境界や身心のズレを明確に実感するようになっていくことがインタビューから読み取れる。例えば「お互いの気持ちが、ちょっとずれ……、どうなんでしょうかね。うーん。(Sub.3:57/434)通、通じる、通……。こう、こうしたほうがいいんじゃないのかなという自分の思いと、相手の思いを酌み取れないんですよ、私が、もう、なので」(Sub.3:61/434)や「あの、知らない者同士という、その、がやったときに、どう動いていいのかとか、どう動かしたらいいのかとか、この人はどう動こうとしているのかとかってというのが、すごい難しいなっちは思いました。(中略)やっぱり、その、心の動きも、こう、見ていかなきゃいけないということなのかなって、ちょっとこう、逆に、だから、何も考えないで、こう、できてないなっっていうか、何も考えないでやるのが一番いいのかなと思いつつ。いろいろこう、はい、考えることが」(Sub.1:116/240)などが話され、こうした語りの背後に、表現を介した身心でのより深いつながりを希求する保護者らの思いが感じられる。

第7回に行った即興作品「花は咲く」は、こうした状況にある保護者らにファシリテータNも加わり、ワークショップに参加する子どもたちの前で、初めて大人たちだけでの「てあわせ表現」を即興で行った時のものである。

即興作品「花は咲く」は、概ね3つのパートで構成されている。まず、「はじまり」は、個別の「てあわせ表現」によってひとつずつの花が咲きはじめるような表現が行われ、「展開部」では、だんだんと花びらがふえて、それらが幾重にもつながり合ったり風に舞って広がったりするような表現へと膨らみ、「終盤」には、みんなで大きな花をゆっくりと咲かせ、その花の世界に私たちが包まれていくような表現が創られた。図6は、各パートの特徴的な部分を、保護者SとファシリテータNとの表現空間内での位置関係およびその箇所を含む写真から捉えたものである。

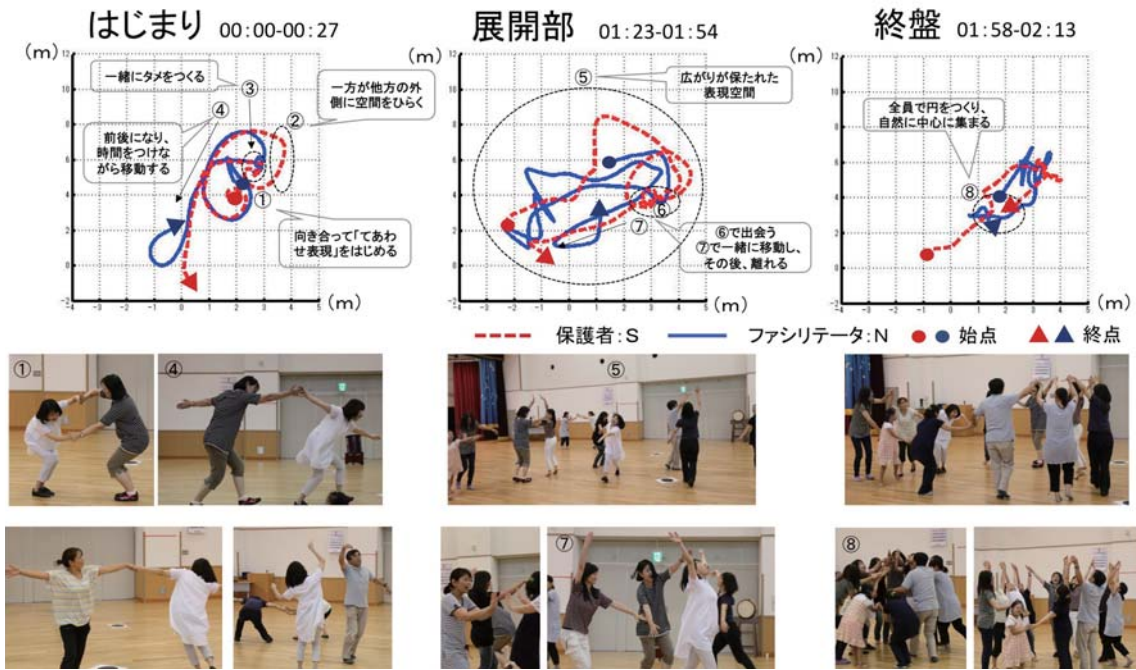


図6 即興作品「花は咲く」における3つのパートでの保護者SとファシリテータNとの位置関係

まず、「はじまり」のパートでは、Nが一人一人の保護者と「てあわせ表現」を行い、個々に咲く花によって、徐々に表現世界が築かれていくようであった。演者間で事前の打ち合わせを行なっていなくても、ピアノ伴奏者の弾く「花は咲く」からイメージを共有することが容易であった。図6に示す「はじまり」のパートでの保護者SとファシリテータNの位置関係とその軌跡からは、二人が向き合って「てあわせ表現」を行っている箇所(図中の①)だけでなく、一方が他方の外側に空間を開く箇所(②)、一緒にタメをつくる箇所(③)、前後に時間差をつけながら、空間内を走って移動している箇所(④)等、2者の身体が多様につながり合っ表現空間を広げ、かつ、タメをつくる静止や速い移動といった表現の時間的な幅が広がっている様子が確認される。これらよりモード3「一本の筆で抽象画を描く」が出現していると考察される。

続く「展開部」になると、表現空間内の演者だけでなく、保護者同士が「てあわせ表現」を行いながら作品に次々と自然に加わり、同じ相手と「てあわせ表現」を行うだけではなく、それぞれが空間内を自在に移動しながら、出会った他者と自由につながったり離れたりして、私たちの花の世界を豊かに膨らませていった。図6に示されるSとNとの個別の関係をみても、それまでは、全体として一定の広がり保たれた表現空間(⑤)内の別の位置で、さまざまな他者と表現を行っていた2者が、⑥で出会い、⑦で一緒に移動して、また離れていくといったように、相手を固定化しない即時的な関係性が随所で作られていることがわかる。ここでは、モード4「流線となって繭が生まれ包まれる」の前半部であるさまざまな線の流れが表現の場全体に広がっていくかのような表現が続いていると考察される。

さらに「終盤」では、私たちが作りあげた表現世界全体を、みんなで包み込むように円になり、最後に中心に集まって(図6の⑧)花の世界に包まれながらひとつの新しい花を咲かせるようにして表現を終えた。図7は、「終盤」における2秒ごとの個々人の位置を示したものである。

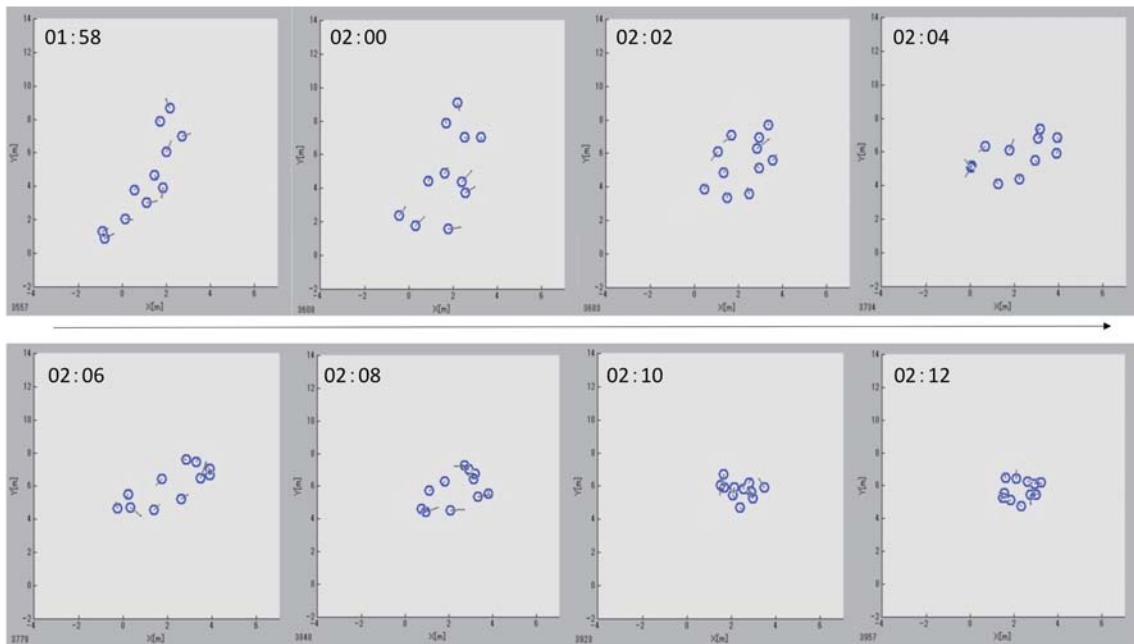


図7 即興作品「花は咲く」(終盤)の2秒ごとの個々人の位置

先の「展開部」では表現空間を広げ、多様なかわりを築いていた個々人が、「終盤」では、それぞれの位置と方向性を変えながら、全体としては示し合わせたかのように徐々に中心部に集まってくる様子が確認される。モード4の後半「薺が生まれ包まれる」かのような表現であると考察される。

このような、ひとつの即興表現内でのモード3からモード4の連続的な移行の過程では、表現の場の参加者はどんな世界を主観的に感じ取っているのだろうか。この即興を行った保護者および観賞していた参加者らに後日感想の記述を求めたところ、表現を行った保護者からは「形があるようで形のない不思議な世界にいつの間にか自分が入っていた」「曲のスタート時は、それぞれに小さな花たちが、色々な場所で自由に風に舞っている感じでしたが、それぞれに出会い、少しずつまとまっていき、お互いをわかりあいながら、空に向かって大きな花を咲かせました」「石巻の皆で一つの作品が出来て、何だか嬉しかった」「離れても不安がなく、安心感があり、間にある空気までもが震えあっているようなつながりの中に身をおいた感覚であった」などのコメントが寄せられた。また、この時の即興作品を観賞していた他の成人参加者の記述には、「てあわせの相手がない時にも、気持ちよくその場に溶け込み、ひとりの表現を楽しんでいるように見えた」「親御さん方も人前で堂々と表現していて、回を重ねてきたことで作り上げた、ここの仲間たちが築き上げた雰囲気や居場所を感じる事ができた」「初めは表現を恥ずかしかっていたお母さま方が子どもから離れてこうして自然に踊ってしまうまでになったんだと、色々なことを思いました」などを収集することができた。これら記述の中で、身体での共創表現にかかわる特徴的な言葉として「形のない不思議な世界」「いつの間にか」「出会い」「わかり合い」「皆でひとつ」「つながり」「場」「居場所」「自然に」などを挙げる事ができる。今回の事例で観察されたモード3からモード4への深化においては、個々の参加者の内部に、共に創り合う表現の世界の内側に入るような感覚が生まれ、そこで相互にわかり合い、自然にひとつの表現となっていく、つまりはモード3の共同的な表現からモード4の共創表現への移行がここにあると

まとめられる。このような表現の場での経験を経て、参加者らには「お母さん方は、この変化も[ああ、そうですね]、本当に、こう、何かこのワークショップが、すごい、やっぱりかけがえのないものというか」(Sub.2:173/282)といった思いが生まれ、「あの一、今後、自分たちの手で、今度は受け継いで、先生方から受け継いで[うん]いただいたものを、こう、続けたいという気持ち、こう、今年になってからすごく強く感じるようになりました[ああ]。ええ」(Sub.2:179/282)と今後のワークショップへの意欲がインタビュー時にも語られるようになってきた。こうした変容を反映し、実際のワークショップの場では、ファシリテータを保護者有志とNとが協働して行うことが試みられている。またワークショップの場以外でも、著者らの現地での滞在中に、保護者らの声かけでさまざまな交流をもつ機会がつけられるようになった。表現を介して相互に築き上げてきた共創の場が、実際の社会的行為へとひろがりをはじめていることが実感される。

5. まとめ:このフィールドは、何を語りかけているのか

本研究では、著者らのこれまでの研究に基づいて推定した「身心の共振」の深化を示す5つのモードを指針とし、身体での共創表現のフィールドでの実践記録の収集とその観察を通して抽出した2つの事例から、以下の点を検討し考察することができた。

事例1では、共振の深化の初期段階において、「かかわりが持てない状況」からモード2へと移行するマクロ的変化の生成過程には、両者の身体での関係性のミクロ的要素の変化が連続的に起きていることが明らかとなった。もちろん、本研究での検討対象は一事例のみであり、自閉症という特定の障害にかかわる個別性は、今後の検討課題である。しかし、被災地の方々とつくりあげてきたこのフィールドが、人々の思いや願いが重なる場であるからこそ、他者への感覚が極めて繊細でかつ非言語的な世界で生きるT男と著者(西)との表現が実現し、交流を続けることでの変化を捉え得たのだと考える。したがって、本フィールドは、身体での共創表現の過程には、通常は現前化しないかもしれない多くのミクロ的要素が身体に重層的に内在しており、「身心の共振」の深化は、単純なモード間の直線的移行のみではないことを、T男と著者(西)との表現を通して語っていると意味づけられる。

一方、事例2では、保護者らの即興作品「花は咲く」において、モード3の共同的な表現からモード4が示す共創表現への移行を捉えることができた。本フィールドの出発点は、津波による被災の現場に身を置き、なぎ倒された木々や積み上げられた瓦礫を前に抱いた、他者への信頼や安心感を築く共創表現のフィールドをつくりたいという切なる願いである。被災地の重い現実の中、現地の方々との緩やか連携を保ちながら定期的な表現の場を継続できたことで、単発型のイベントでは得ることのできない多くの貴重な出会いと気づきが参加するそれぞれにもたらされていると感じる。共同から共創へと表現が移行する「花は咲く」では、見えない世界を想い、それを新たに構築する願いを共有し、いくつものズレを超えながら試行錯誤を続けてきた、これまでのフィールドの形成過程そのものが凝縮して映り込んでいるかのようなのである。そして、その世界の中で、生き生きと自己を表現し、他者と豊かに交流する保護者らの変容した姿は、この段階での本フィールドの姿そのものであるとまとめられる。

さらに、私たちのフィールドは、表現による人々の共創が、個々の身体的変容にとどまることなく、主体性の発揮や居場所感の共創出といった社会的変容へと連なる未来を、それぞれの身体が発する柔らかな言葉によって、静かに力強く語りはじめているかのようでもある。現地の

方々と共に実践を続けながら、今後の検討課題としたい。

注

1)本論文での「身心の共振」とは、著者(西)の次の記述を出発点とするものである。「“共振”という用語それ自体は、一般的には物質間の電気振動の共鳴という物理的現象を指し示すものである。しかしながら哲学や心理学等の領域では、この言葉を異なる身体同士が相互に能動性と受動性を発揮し、それでいて共に揺れあっているような相互作用の比喩として多く用いている。したがって本論文では、これらの領域での“共振”の使い方に基づいて、身体同士の“互いに影響し合う関係性”から発現する一体感のある心理・身体的状況を“共振”と定義する」(西 2003,14頁)。

加えて、関連文献での「共振」という用語を用いた記述例を以下に示す。なお、著者らは、現場での実践研究(西・野口2005、西2012a、西2012b)と工学的手法による科学的検討(Watanabe,Miwa 2012、Miwa, Itai, Watanabe, Nishi 2013)との往還を継続しながら、「身心の共振」の二重的なはたらきや深化の様相に関する研究を継続している。

①市川浩,1997,『身の構造』青土社.

「これにたいして、他者の身の統合との関係において起こる一種の感応ないし共振を〈同調〉と呼びたいと思います」54頁

②中村雄二郎,1993,『共振する世界』青土社.

「リズムが合うとか共振するとかいうことが面白いのは、それが人間同士の間だけでなく、人間と動物や自然、人間と物との間についても、神秘的にでなく言える事柄だからである」12頁

③廣松渉・増山眞緒子,1986,『共同主観性の現象学』世界書院.

第1部第3章:共振的振動系と情動反応(本章では、共振、共振性、共振動現象、共振的機構等が多く使われている。以下、一例を示す)

「・・・ここに報告されている母子間共応が「引き込み(エントレインメント)」による「共振」現象であることまでは確かだと言わねばなるまい。〈中略〉 そういう共振的同期化がなかなか形成されない場合には、情緒的に不安定になったり不快感を感じたりする。情緒的現象にとっては、一般に、身体的リズムの共振性ということが重要なファクターをなしていることを誰しも認めるのではないかと念う」98頁

参考文献

廣松渉・増山眞緒子,1986,『共同主観性の現象学』世界書院.

市川浩,1997,『身の構造:身体論を超えて』青土社.

木村敏,2005,『関係としての自己』みすず書房.

小林隆児・鯨岡峻,2005『自閉症の関係発達臨床』日本評論社.

鯨岡峻,2005,『エピソード記述入門-実践と質的研究のために』東京大学出版会.

鯨岡峻,2012,『エピソード記述を読む』東京大学出版会.

- 鯨岡峻,2013,『なぜエピソード記述なのか-「接面」の心理学のために』東京大学出版会.
- 三輪敬之,2000,「共創における生命的コミュニケーション」清水博編,『場と共創』,NTT出版.
- 三輪敬之,2012,「共創表現とコミュニケーション支援」『計測と制御』51(11),計測自動制御学会.
- Y. Miwa, S. Itai, T. Watanabe, H. Nishi, 2013, Generation Dynamics of Sympathetic Embodied Awareness in Hand Contact Improvisation, Proceedings of IASDR 2013 - 5th International Congress of International Association of Societies of Design Research:Tokyo.
- 三輪敬之・栗栖広明・上原拓也・板井志郎・西洋子,2014,「集団の共創表現における場の計測・評価に関する研究:ファシリテータに着目した身体表現活動における位置計測」『ヒューマンインタフェース学会研究会』16(3),ヒューマンインタフェース学会.
- 村上靖彦,2008,『自閉症の現象学』勁草書房.
- 中村雄二郎,1993,『共振する世界』青土社.
- 西洋子,2003,「身体によるインタラクティブなコミュニケーション:身体表現のフィールドでの実践と研究の統合を目指して」神戸大学博士論文.
- 西洋子・野口晴子,2005,「保育者としての身体的感性を育てる教育:授業での身体表現の体験による“共振”の形成とその段階の変化」『保育学研究』43(2),日本保育学会.
- 西洋子,2012a,「出会いと共振:『共振する身体』から『共振する生命』へ」『生者と死者の交流:死生学年報2012』リトン.
- 西洋子,2012b,「表現するからだ:共創の原初、未来への跳躍」『計測と制御』51(11),計測自動制御学会.
- 野間俊一,2012,『身体の時間:<今>を生きるための精神病理学』筑摩書房.
- 清水博編著・久米是志・三輪敬之・三宅美博,2000,『場と共創』N T T 出版.
- 清水博,2007,「統合による共存在の深化」. 統合学術国際研究所,『「統合学」へのすすめ:生命と存在の深みから』統合学研究叢書第3巻,晃洋書房.
- T.Watanabe,Y. Miwa,2012,Duality of Embodiment and Support for Co-creation in Hand Contact Improvisation,Journal of Advanced Mechanical Design, System, and Manufacturing6(7):Tokyo